ウィキソース

老子道徳経

老子道徳経
作者：老子
訳者：井上秀天

老子道徳経（ろうしどうとくきょう）は、中国の春秋時代の思想家老子が書いたと伝えられる書。単に『老子』とも『道徳経』とも表記される。また、老子五千言・五千言とも。『荘子』と並ぶ道家の代表的書物。道教では『道徳真経』ともいう。上篇37章（道経）と下篇44章（徳経）に分かれ、あわせて81章から構成される。— ウィキペディア日本語版「老子道徳経」より。

姉妹プロジェクト：Wikipediaの記事, データ項目

- 訓点および書き下し文は井上秀天『老子の新研究：漢英考証』（国立国会図書館デジタルコレクション (https://dl.ndl.go.jp/):info:ndljp/pid/1179772/1/40 (https://dl.ndl.go.jp/pid/1179772/1/40)）による。

一章

道可レ道、非二常道一。名可レ名非二常名一。無名二天地之始一、有名二萬物之母一。故、常無欲三以觀二其妙一、常有欲三以觀二其徼一。此兩者同、出而異レ名。同謂二之玄一、玄之又玄、衆妙之門。

〈道の道ふべきは常道にはあらず。名の名づくべきは常名にはあらず。無は天地の始めと名づくべく、有は萬物の母と名づくべきなり。故に、常無にして以てその妙を觀んと欲し、常有にして以てその徼を觀んと欲せよ。この兩者は同じきも、出でては名を異にするなり。同なるこれを玄と謂ふも、玄のまた玄にして、衆妙の門なり。〉

二章

天下皆知二美之爲一レ美、斯惡已。皆知二善之爲一レ善、斯不善已。故、有無相生、難易相成、長短相形、高下相傾、音聲相和、前後相隨。是以、聖人處二無爲之事一、行二不言之教一。萬物作而不レ辭、生而不有。爲而不レ恃。功成而不レ居。夫惟不レ居。是以不レ去。

〈天下はみな美の美たることを知るも、これ惡なるのみ。みな善の善たることを知るも、これ不善なるのみ。故に、有無は相生じ、難易は相成り、長短は相形はれ、高下は相傾き、音聲は相和し、前後は相隨ふなり。是を以て、聖人は無爲の事に處り、不言の教を行ふ。萬物は作るも辭せず。生ずるも有せず。爲すも恃まず。功成るも居らず。それ惟居らず。是を以て去らざるなり。〉

三章

不レ尚レ賢、使二民不一レ爭、不レ貴二難レ得之貨一、使二民不一レ爲レ盜、不レ見レ可レ欲、使二心不一レ亂。是以、聖人之治、虛二其心一、實二其腹一、弱二其志一、强二其骨一。常使二民無レ知、無一レ欲、使三夫智者不二敢爲一也。爲二無爲一則無レ不レ治矣。

〈賢を尚ばざれば、民をして爭はざらしめ、得がたきの貨を貴ばざれば、民をして盜たらざらしめ、欲すべきを見さざれば、心をして亂れざらしむるなり。是を以て、聖人の治むるや、その心を虛にし、その腹を實にし、その志を弱にし、その骨を强にし、常に民をして知なく、欲なからしめ、かの知者をして敢てなさざらしむるなり。無爲をなさば治まらざるなし。〉

四章

道沖而用レ之、或不レ盈。淵乎似二萬物之宗一。挫二其鋭一、解二其紛一、和二其光一、同二其塵一。湛乎似二或存一。吾不レ知二誰之子一、象二帝之先一。

〈道は沖にしてこれを用ふるも、或は盈ず。淵乎として万物の宗に似たり。その鋭を挫き、その紛を解き、その光を和げ、その塵に同うし、湛乎として或は存するに似たり。吾は誰の子たるかを知らず。帝の先に象たり。〉

五章

天地不仁、以二萬物一爲二芻狗一。聖人不仁、以二百姓一爲二芻狗一。天地之間、其猶二橐籥一乎。虛而不レ屈。動而愈出。多聞數窮、不レ如レ守レ中。

〈天地は不仁ならんや、萬物を以て芻狗となすほどに。聖人は不仁ならんや、百姓を以て芻狗となすほどに。天地の間は、それ猶ほ橐籥のごときか。虛にして屈せず。動けばいよいよ出づ。多言なればしばしば窮すれば、中を守るにはしかず。〉

六章

谷神不レ死、是謂二玄牝一。玄牝之門、是謂二天地根一。綿綿若レ存、用レ之不レ勤。

〈谷神は死せず。これを玄牝と謂ふ。玄牝の門、これを天地の根と謂ふ。綿綿として存するがごとくして、これを用ふるも勤れず。〉

七章

天長地久。天地所二以能長且久一者、以三其不二自生一。故能長生。是以、聖人後二其身一而身先、外二其身一而身存、非レ以二其無私一耶。故、能成二其私一。

〈天は長く地は久し。天地のよく長く且つ久しき所以のものは、その自ら生ぜざるを以てなり。故によく長生す。是を以て、聖人はその身を後にするも而も身は先だち、その身を外にするも而も身の存するは、その無私なるを以てにあらずや。故に、よくその私をなすなり。〉

八章

上善若レ水。水善利二萬物一而不レ爭。處二衆人所一レ惡、故幾二於道一。居善地、心善淵、與善仁、言善信、政善治、事善能、動善時。夫唯不レ爭、故無レ尤。

〈上善は水のごとし。水はよく万物を利して爭はず、衆人の悪む所に處る。故に道に幾し。居は善地、心は善淵、與すれば善仁、言へば善信、政は善治、事は善能、動けば善時なり。それたゞ爭はず、故に尤なし。〉

九章

持而盈レ之、不レ如二其已一。揣而鋭レ之、不レ可二長保一。金玉滿レ堂、莫二之能守一。富貴而驕、自遺二其咎一。功成名遂身退、天之道載。

〈持してこれを盈たさんよりは、その已むにしかず。揣つてこれを鋭くすれば、長く保つべからず。金玉堂に滿つるも、これを能く守ることなし。富貴にして驕れば、自からその咎を遺さん。功成り名遂げて身退くは、天の道なる載。〉

十章

營魄抱レ一、能無レ離乎。專レ氣致レ柔、能如二嬰兒一乎。滌除玄覽、能無レ疵乎。愛レ民治レ國、能無知乎。天門開闔、能爲レ雌乎。明白四達、能無爲乎。生レ之畜レ之。生而不レ有。爲而不レ恃。長而不レ宰。是謂二玄德一。

〈營魄一を抱きて、よく離るゝことなからんか。気を專らにし柔を致して、よく嬰児の如くならんか。滌除玄覽して、よく疵なからんか。民を愛し国を治むるには、よく無爲なからんか。天門開闔して、よく雌たらんか。明白四達して、よく無知ならんか。これを生じこれを畜ふ。生ずるも有せず、爲すも恃まず。長ずるも宰せず。これを玄德と謂ふ。〉

十一章

三十輻共二一轂一。當二其無一、有二車之用一。埏レ埴以爲レ器。當二其無一、有二器之用一。鑿二戸牖一以爲レ室。當二其無一、有二室之用一。故、有之以爲レ利、無之以爲レ用。

〈三十輻は一轂をともにす。その無なるに當つて、車の用あり。埴を埏して以て器をなす。その無なるに當つて、器の用あり。戸牖を鑿つて以て室となす。その無なるに當つて、室の用あり。故に、有の以て利たるは、無の以て用をなす（が故）なり。〉

十二章

五色令二人目盲一、五音令二人耳聾一、五味令二人口爽一、馳騁畋獵、令二人心發狂一、難レ得之貨、令二人行妨一。是以、聖人爲レ腹不レ爲レ目。故、去レ彼取レ此。

〈五色は人の目をして盲ならしめ、五音は人の耳をして聾ならしめ、五味は人の口をして爽ならしめ、馳騁田獵は、人の心をして發狂せしめ、得がたきの貨は、人の行をしてを妨はしむ。是を以て、聖人は腹をなして目をなさず。故に、彼を去りて此を取るなり。〉

十三章

寵辱若レ驚。貴大患若レ身。何謂二寵辱若一レ驚。寵爲レ上、辱爲レ下、得レ之若レ驚、失レ之若レ驚、是謂二寵辱若一レ驚。何謂二貴大患若一レ身。吾所三以有二大患一者、爲二吾有一レ身。及二吾無一レ身、吾有二何患一。故、貴以レ身、爲二天下一者、則可三以寄二天下一。愛以レ身、爲二天下一者、則可三以託二天下一。

〈寵は辱なり驚くが如し。貴は大患なり身のごとし。何をか寵〔ママ〕は辱なり驚くがごとしと謂ふ。寵を上たり、辱を下たるも、これを得るに驚くがごとく、これを失ふにも驚くがごとし。これを寵は辱なり、驚くがごとしと謂ふ。何をか貴は大患なり身のごとしと謂ふ。吾に大患ある所以は、吾が身を有するがためなり。吾に身なきに及んで、吾に何の患かあらん。故に、貴ぶには身を以てして、天下を爲むる者には、則ち以て天下を寄すべし。愛するには身を以てして、天下を爲むる者には、則ち以て天下を託すべし。〉

十四章

視レ之不レ見、名曰レ夷。聽レ之不レ聞、名曰レ希。搏レ之不レ得、名曰レ微。此三者、不レ可二以致詰一、故混而爲レ一。其上不レ皦。其下不昧。繩繩兮不レ可レ名、復二歸於無物一。是謂二無狀之狀、無象之象一。是謂二恍惚一。迎レ之不レ見二其首一、隨レ之不レ見二其後一。執二古之道一、以御二今之有一。能知二古始一、是謂二道紀一。

〈これを視れども見えず、名づけて夷と曰ふ。これを聽けども聞えず、名づけて希と曰ふ。これを搏へんとするも得ず、名づけて微と曰ふ。その三つの者は、以て致詰すべからず。故に混じて一となす。その上は皦かならず。その下は昧からず。繩繩兮として名づくべからずして、無物に復歸す。これを無狀の狀、無物の象と謂ふ。これを惚恍と謂ふ。これを迎ふるもその首を見ず。これに隨ふもその後を見ず。古の道をとりて、以て今の有を御し、よく古始を知る。これを道紀と謂ふ。〉

十五章

古之善爲レ士者、微妙玄通、深不レ可レ識。夫唯不レ可レ識。故强爲二之容一、豫兮若二冬涉一レ川、猶兮若レ畏二四鄰一、儼兮其若レ客、渙兮其若二冰將一レ釋、敦兮其若レ樸、曠兮其若レ谷、混兮其若レ濁。孰能濁、以靜之徐清。孰能安、以動之徐生。保二此道一者、不レ欲レ盈。夫唯不レ盈。故能敝不二新成一。

〈古の善く士たる者は、微妙玄通、深くして識るべからず。それただ識るべからず。故に强ひてこれが容をなさば、豫兮として冬に川を渉るがごとく、猶兮として四隣を畏るゝがごとく、儼兮としてそれ客たるが如く、渙兮として冰のまさに釈けんとするがごとく、敦兮としてそれ樸のごとく、曠兮としてそれ谷の若く、混兮としてそれ濁るがごとし。孰かよく濁りて、以て静かにして徐に清からん。孰かよく安んじて、以て動きて徐に生ぜん。この道を保つ者は、盈つることを欲せず。それただ盈たず。故によく敝れて新たに成さず。〉

十六章

致レ虛極、守レ靜篤、萬物並作、吾以觀二其復一。夫物芸芸、各歸二其根一。歸レ根曰レ靜、是謂レ復レ命、復レ命曰レ常、知レ常曰レ明。不レ知レ常、妄作凶。知レ常容。容乃公。公乃王。王乃天。天乃道。道乃久、没レ身不レ殆。

〈虛を致すこと極まり、靜を守ること篤ければ、萬物ならび作るも、吾は以て復を觀る。それ物は芸芸たるも、おのおのその根に歸す。根に歸するを靜と曰ひ、是を命に復すと謂ひ、命に復するを常と曰ひ、常を知るを明と曰ふ。常を知らざれば、妄作して凶なり。常を知れば容。容なれば乃ち公。公なれば乃ち王。王なれば乃ち天。天なれば乃ち道。道なれば乃ち久しくして、身を没するも殆からざるなり。〉

十七章

太上、下不レ知レ有レ之。其次、親レ之譽レ之。其次、畏レ之、其次、侮レ之。故、信不レ足焉、有レ不レ信。猶兮其貴レ言。功成事遂、百姓皆謂二我自然一。

〈太上には、下これあることを知らず。その次には、これに親しみこれを譽む。その次には、これを畏れ、その次には、これを侮る。故に、信足らざれば、信ぜざることあるなり。猶兮としてそれ言を貴びたり。功成り事遂げて、百姓皆我が自然なりと謂ふ。〉

十八章

大道廢、有二仁義一。智慧出、有二大僞一。六親不レ和、有二孝慈一。國家昏亂、有二忠臣一。

〈大道廢れて、仁義あり。智慧出で、大僞あり。六親和せずして、孝慈あり。國家昏亂して、忠臣あるなり。〉

十九章

絶レ聖棄レ智、民利百倍。絶レ仁棄レ義、民復二孝慈一。絶レ巧棄レ利、盜賊無レ有。此三者、以爲文而不レ足也。故令レ有レ所レ屬。見レ素抱レ樸、少レ私寡レ欲。

〈聖を絶ち智を棄つれば、民の利は百倍せん。仁を絶ち義を棄つれば、民は孝慈に復せん。巧を絶ち利を棄つれば、盜賊はあることなからん。この三の者は以爲に文のみにして未だ足らざるなり。故に屬する所あらしめよ。素を見はし樸を抱き、私を少なくし欲を寡なからしめよ。〉

二十章

絶レ學無レ憂。唯之與レ阿、相去幾何。美之與レ惡、相去若何。人之所レ畏、不レ可レ不レ畏、荒兮其未レ央哉。衆人熙熙、如二享二太牢一、如レ登二春臺一、我獨泊兮其未レ兆。如二嬰兒之未一レ孩、乘乘兮若レ無レ所レ歸。衆人皆有レ餘、而我獨若レ遺。我愚人之心也哉。沌沌兮。俗人皆昭昭、我獨若レ昏。俗人皆察察、我獨悶悶。澹兮若レ海、飂兮若レ無レ所レ止。衆人皆有レ以、而我獨頑且鄙。我獨欲レ異二於人一、而貴二食母一。

〈學を絶たば憂なからん。唯と阿との、相去ることはいくばくぞ。善と悪と、相去ることはいかん。人の畏るる所は、畏れざるべからざるも、荒兮としてそれ未だ央らざるかな。衆人は熙熙として、太牢を享くるが如く、春臺に登るが如きも、我は獨り泊兮としてそれ未だ兆さず、嬰児の未だ孩せざるが如く、乗乗兮として帰する所なきがごとし。衆人はみな餘ありて、しかも我は獨り遺れたるがごときも、我は愚人の心ならんや。沌沌兮たるのみ。俗人はみな昭昭たるも、我は獨り昏きがごとし。俗人はみな察察たるも、我は獨り悶悶たり。澹兮として海のごとく、飂兮として止まる所なきがごとし。衆人はみな以することあるも、しかも我は獨り頑かつ鄙なり。我は人に異ならんことを欲して、而して食母を貴ぶなり。〉

二十一章

孔德之容、惟道是從。道之爲レ物、惟恍惟惚。惚兮恍兮、其中有レ象。恍兮惚兮、其中有レ物。窈兮冥兮、其中有レ精。其精甚眞、其中有レ信。自レ古及レ今、其名不レ去、以閱二衆甫一。吾何以知二衆甫之然一哉。以レ此。

〈孔德の容は、ただ道にこれ從ふなり。道の物たる、これ恍たりこれ惚たり。恍兮たり惚兮たるも、その中に象有り。恍兮たり惚兮たるも、その中に物有り。窈兮たり冥兮たるも、その中に精有り。その精甚だ眞にして、その中に信有り。古より今に及びて、その名は去らず。以て衆甫を閲ぶ。吾れなにを以て衆甫の然るを知れるや。これを以てなり。〉

二十二章

曲則全、枉則直、窪則盈、敝則新、少則得、多則惑。是以、聖人抱レ一、爲二天下式一。不二自見一、故明。不二自是一、故彰。不二自伐一、故有レ功。不二自矜一、故長。夫唯不レ爭。故天下莫二能與レ之爭一。古之所レ謂、曲則全者、豈虛言哉。誠全而歸レ之。

〈曲なれば則ち全く、枉なれば則ち直く、窪なれば則ち盈ち、敝ければ則ち新しく、少ければ則ち得、多ければ則ち惑はん。是を以て、聖人は一を抱きて、天下の式となる。自ら見さず、故に明かなり。自ら是とせず、故に彰る。自ら伐らず、故に功あり。自ら矜らず。故に長し。それただ爭はず。故に天下能くこれと爭ふことなし。古の謂はゆる、曲なれば則ち全しとは、豈虛言ならんや。誠に全くして而してこれに歸するなり。〉

二十三章

希言自然。故、飄風不レ終レ朝。驟雨不レ終レ日。孰爲レ此者。天地。天地尚不レ能レ久。而況於レ人乎。故、從二事於道一者、道者同二於道一、德者同二於德一、失者同二於失一。同二於道一者、道亦樂レ得レ之、同二於德一者、德亦樂レ得レ之、同二於失一者、失亦樂レ得之。信不レ足、有レ不レ信焉。

〈希言は自然なり。故に、飄風は朝を終へず。驟雨は日を終へず。孰かこれをなすものぞ。天地なり。天地すら尚ほ久しきこと能はず。而るを況や人に於てをや。故に、道に從事する者は、道者とは道に同じうし、德者とは德に同じうし、失者とは失に同じうす。道に同じうする者は、道もまたこれを得るを樂み、德に同じうする者は、德もまたこれを得るを樂み、失に同じうする者は、失もまたこれを得るを樂むなり。信足ざれば、信ぜざることあり。〉

二十四章

跂者不レ立。跨者不レ行。自見者不レ明。自是者不レ彰。自伐者無レ功。自矜者不レ長。其在レ道也、曰二餘食贅行一、物或惡レ之。故有道者不レ處也。

〈跂つ者は立たず。跨ぐ者は行かず。自から見はす者は明かならず。自から是とする者は彰はれず。自から伐る者は功なし。自から矜る者は長からず。その道にありてや、餘食贅行と曰ひ、物或はこれを悪む。故に有道者は處ざるなり。〉

二十五章

有レ物混成、先二天地一生。寂兮寥兮。獨立而不レ改、周行而不殆。可三以爲二天地母一。吾不レ知二其名一、字レ之曰レ道、强爲二之名一曰レ大、大曰レ逝、逝曰レ遠、遠曰レ反。故、道大、天大、地大、王亦大。域中有二四大一、而王居二其一一焉。人法レ地、地法レ天、天法レ道、道法二自然。

〈物ありて混成し、天地に先だつて生ぜり。寂兮たり寞兮たり。獨立して改めず、周行して殆からず。以て天下の母たるべし。吾はその名を知らざるも、これに字して道と曰ひ、强ひてこれが名を為して大と曰ひ、大を逝と曰ひ、逝を遠と曰ひ、遠を反と曰ふ。故に、道は大、天も大、地も大、王も又大なり。域中に四大ありて、王はその一に居る。人は地に法とり、地は天に法とり、天は道に法とり、道は自然に法とるなり。〉

二十六章

重爲二輕根一、靜爲二躁君一。是以、聖人終日行、而不レ離二輜重一。雖レ有二榮觀一、燕處超然。如何萬乘之主、而以レ身輕二天下一。輕則失レ臣、躁則失レ君。

〈重は輕の根たり、靜は躁の君たり。是を以て、聖人は終日行けども、而も輜重を離れず。榮觀ありと雖も、燕処して超然たり。如何ぞ萬乘の主にして、而も身を以て天下に輕くせるぞ。輕ければ則ち臣を失ひ、躁しければ則ち君を失はん。〉

二十七章

善行無二轍跡一。善言無二瑕謫一。善計不レ用二籌策一。善閉無二關楗一、而不レ可レ開。善結無二繩約一、而不レ可レ解。是以、聖人常善救レ人。故無二棄人一。常善救レ物。故無二棄物一。是謂二襲明一。故、善人者不善人之師、不善人者善人之資。不レ貴二其師一、不レ愛二其資一、雖レ知大迷。是謂二要妙一。

〈善行には轍迹なし。善言には瑕謫なし。善計には籌索を用ひず。善閉には関楗なくして、而も開くべからず。善結には縄約なくして、而も解くべからず。是を以て、聖人は常に善く人を救ふ。故に棄人なし。常に善く物を救ふ。故に棄物なし。是を襲明と謂ふ。故に、善人は不善人の師にして、不善人は善人の資なり。その師を貴ばず、その資を愛せざれば、知たりと雖も大に迷へる。これを要妙と謂ふ。〉

二十八章

知二其雄一、守二其雌一、爲二天下谿一。爲二天下谿一、常德不レ離、復二歸於嬰兒一。知二其白一、守二其黑一、爲二天下式一。爲二天下式一、常德不レ忒、復二歸於無極一。知二其榮一、守二其辱一、爲二天下谿一。爲二天下谿一、常德乃足、復二歸於樸一。樸散則爲レ器。聖人用レ之、則爲二之長一、故、大制不レ割。

〈その雄を知りて、その雌を守れば、天下の谿となる。天下の谿となれば、常德は離れずして、嬰兒に復歸す。その白を知り、その黑を守れば、天下の式と為る。天下の式となれば、常の德は忒はずして、無極に復歸す。その榮を知り、その辱を守れば、天下の谷となる。天下の谷となれば、常德は乃ち足つて、樸に復歸す。樸散ずれば則ち器となる。聖人これを用ひて、則ち官長となる。故に、大制にして割かざるなり。〉

二十九章

將下欲取二天下一レ而爲上レ之、吾見二其不一レ得已。天下神器、不レ可レ爲也、不レ可レ執也。爲者敗レ之、執者失レ之。凡物、或行、或隨、或噓、或吹、或强、或羸、或載、或墮。是以、聖人去レ甚、去レ奢、去レ泰。

〈天下を取つて、これを爲めんと將欲するも、吾はその得ざるを見るのみ。天下は神器なれば、爲むべからざるなり。爲めんとする者はこれを敗り、執らんとする者はこれを失はん。凡そ物は、或は行き、或は隨ひ、或は噓き、或いは吹き、或は强くし、或は羸くし、或は載り、或いは墮る。是を以て聖人は甚を去り、奢を去り、泰を去るなり。〉

三十章

以レ道佐二人主一者、不三以レ兵强二天下一。其事好レ還。師之所レ處、荊棘生焉、大軍之後、必有二凶年一。故、善者果而已矣。不二敢以取一レ强焉。果而勿レ矜。果而勿レ伐。果而勿レ驕。果而不レ得レ已。果而勿レ强。物壯則老。是謂二不道一。不道早已。

〈道を以て人主を佐くる者は、兵を以て天下に强くせず。その事は還るを好むなり。師の處りし所には、荊棘生じ、大軍の後には、必ず凶年あり。故に、善者は果して已む。敢て强を取らず。果して矜ることなかれ。果して伐ることなかれ。果して驕ることなかれ。果して已むを得ざれ。果して强なることなかれ。物は壯なれば則ち老ゆ。これを不道と謂ふ。不道なれば早く已むなり。〉

三十一章

夫佳兵者不祥之器、物或惡レ之。故、有道者不レ處。是以、君子、居則貴レ左、用レ兵則貴レ右。兵不祥之器、非二君子器一。不レ得レ已而用レ之、恬淡爲レ上。勝而不レ美。美レ之者、是樂二殺人一。樂二殺人一者、則不レ可レ得二志於天下一矣。（故、吉事尙レ左、凶事尙レ右。是以、偏將軍處レ左、上將軍處レ右。言下以二喪禮一處上レ之。）殺人衆多、則以二悲哀一泣レ之、戰勝者、則以二喪禮一處レ之。

〈夫れ佳兵は不祥の器にして、物或はこれを惡む。故に、有道者は處らざるなり。是を以て、君子は、居るには則ち左を貴び、兵を用ふるには則ち右を貴ぶ。兵は不祥の器にして、君子の器にあらず。やむを得ずしてこれを用ふるも、恬淡を上となし、勝つとも而も美とせざるなり。これを美とする者は、これ殺人を楽むなり。殺人を楽む者は、則ち志を天下に得べからず。（故に、吉

事には左を尚び、凶事には右を尚ぶ。是を以て、偏将軍は左に處り、上将軍は右に處る。喪禮を以てこれに處るを言ふなり。）人を殺すことの衆多なれば、則ち悲哀を以てこれを泣き、戰に勝てば、則ち喪禮を以てこれに處るなり。〉

三十二章

道常無レ名、樸雖レ小、天下不二敢臣一。侯王若能守、萬物將二自賓一。天地相合、以降二甘露一、民莫二之令一、而自均。始制有レ名。名亦既有、夫亦將レ知レ止、知レ止、所以不一レ殆。譬三道之在二天下一、猶三川谷之於二江海一。

〈道は常にして名なく、朴なりにして小なりと雖も、天下に敢て臣とせず。侯王もしよく守らば、万物はまさに自ら賓せんとす。天地は相合ひて、以て甘露を降し、民はこれを令するなくして、而も自から均しからん。はじめて制して名あり。名も亦すでにあるも、それ亦止まることを知らんとす。止まることを知るは、殆からざる所以なり。道の天下にあるを譬ふれば、猶ほ川谷の江海に於けるがごときなり。〉

三十三章

知レ人者智、自知者明。勝レ人者有レ力、自勝者强。知レ足者富。强レ行者有レ志。不レ失二其所一者久。死而不レ亡者壽。

〈人を知るものは智にして、自らを知るものは明なり。人に勝つ者は力ありて、自らに勝つ者は强なり。足ることを知るものは富み、行ひを强むるものは志を有つ。その所を失はざる者は久しく、死するも亡びざるものは壽なり。〉

三十四章

大道汎兮、其可二左右一。萬物恃レ之、以生而不レ辭。功成不二名有一。愛二養萬物一、而不レ爲レ主。可レ名二於小一矣。萬物歸、而不レ爲レ主。可二名爲一レ大。是以、聖人終不レ爲レ大。故、能成二其大一。

〈大道は汎兮として、其れ左右すべし。萬物はこれに恃みて、以て生ずるも辭せず。功あるも名とし有せず。萬物を愛養して、而も主とならず。小と名くべし。萬物は歸すれども、而も主とならず。名づけて大となすべし。是を以て、聖人は終に自ら大とならず。故によくその大を成すなり。〉

三十五章

執二大象一天下往。往而不レ害。安平泰。樂與レ餌、過客止。道之出レ口、淡乎其無レ味、視レ之不レ足レ見、聽レ之不レ足レ聞、用レ之不レ足レ既。

〈大象を執れば天下は往く。往くも而も害せず。安平泰なり。楽と餌とには、過客も止まるも、道の口より出づるは、淡乎としてそれ味ひなし。これを視れども見るに足らず、これを聽けども聞くに足らざるも、これを用ふれば既すべからず。〉

三十六章

將二欲歙一レ之、必故張レ之。將二欲弱一レ之、必故强レ之。將二欲廢一レ之、必故興レ之。將二欲取一レ之、必故與レ之。是謂二微明一。柔之勝レ剛、弱之勝レ强。魚不レ可レ脫二於淵一、國之利器、不レ可二以示一レ人。

〈これを歙めんと將欲すれば、必ず固くこれを張れよ。これを弱めんと將欲すれば、必ず固くこれを强くせよ。これを廃せんと將欲すれば、必ず固くこれを興せよ。これを奪はんと將欲すれば、必ず固くこれを與へよ。これを微明と謂ふなり。柔は剛に勝ち、弱は强に勝つ。魚は淵より脫すべからず。國の利器は以て人に示すべからず。〉

三十七章

道常無レ爲、而無レ不レ爲。侯王若能守、萬物將二自化一。化而欲レ作、吾將三鎭レ之以二無名之樸一。無名之樸、亦將レ不レ欲。不レ欲以靜、天下將二自正一。

〈道は常にして爲すことなきも、而も爲さざることなし。侯王もしよく守らば、萬物はまさに自から化せんとす。化して作らんとすれば、吾はこれを鎭するに無名の樸を以てせんとす。無名の樸も、亦まさに欲せざらんとす。欲せずして以て靜なれば、天下はまさに自から正しからんとす。〉

三十八章

上德不レ德。是以有レ德。下德不レ失レ德。是以無レ德。上德無レ爲、而無レ以レ爲。下德爲レ之、而無二以爲一。上仁爲レ之、而無二以爲一。上義爲レ之、而有以爲。上禮爲レ之、而莫二之應一、則攘レ臂而仍レ之。 故、失レ道而後德。失レ德而後仁。失レ仁而後義。失レ義而後禮。夫禮者、忠信之薄、而亂之首也。前識者、道之華、而愚之始也。是以、大丈夫處二其厚一、不レ處二其薄一。處二其實一、不レ處二其華一。故、去レ彼取レ此。

〈上德は德とせず。是を以て德あり。下德は德を失はざらんとす。是を以て德なし。上德は爲すことなくして、而も爲さざることなし。下德はこれを爲して、而も以て爲すことなし。上仁はこれを爲して、而も以て爲すことなし。上義はこれをなして、而も以て爲すことあり。上禮はこれを爲して、而もこれに應ずることなければ、則ち臂を攘げてこれを仍く。故に、道を失つて而して後に德あり。德を失つて而して後に仁あり。仁を失つて而して後に義あり。義を失つて而して後に禮あり。夫れ禮は、忠信の薄にして、而して亂の首なり。前識者は、道の華にして、而して愚の始なり。是を以て大丈夫は、その厚きに處つて、その薄きに處らず。その實に處つて、その華に處らず。故に、彼を去つて此れを取るなり。〉

三十九章

昔之得一レ者。天得レ一以淸、地得レ一以寧、神得レ一以靈、谷得レ一以盈、萬物得レ一以生、侯王得レ一、以爲二天下正一。其致レ之一也。天無レ以レ淸、將恐裂。地無レ以レ寧、將恐發。神無レ以レ靈、將恐歇。谷無レ以レ盈、將恐竭。萬物無レ以レ生、將恐滅。侯王無レ以レ正、而貴高、將恐蹷。故、貴以レ賤爲レ本、高以レ下爲レ基。是以、侯王自謂二孤寡不谷一。此其以レ賤爲レ本邪、非乎。故、致レ數レ輿レ無レ輿。不レ欲二琭琭如レ玉、珞珞如一レ石。

〈昔は一を得たる者なり。天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧く、神は一を得て以て靈となり、谷は一を得て以て盈ち、萬物は一を得て以て生じ、侯王は一を得て以て天下の正となる。そのこれを致すは一なり。天清きを以てことなければ、將恐らくは裂けん。地寧きを以てすることなければ、將恐らくは發せん。神靈を以てすることなければ、將恐らくは歇ん。谷盈つるを以てすることなければ、將恐らくは竭きん。萬物生ずるを以てすることなければ、將恐らくは滅せん。侯王正しきを以てすくことなく、而も貴高ならば、將恐らくは蹷れん。故に、貴は賤を以て本となし、高きは下きを以て基となすなり。是を以て侯王は自から孤寡不穀と謂ふ。これ、その賤を以て本となすか、あらずや。故に、輿を數ふることを致せば輿なし。琭琭として玉の如く、珞珞として石の如くなるを欲せず。〉

四十章

反者道之動、弱者道之用。天下萬物、生二於有一、有生二於無一。

〈反は道の動にして、弱は道の用なり。天地萬物は、有より生じ、有は無より生ず。〉

四十一章

上士聞レ道、勤而行レ之。中士聞レ道、若レ存若レ亡。下士聞レ道、大笑レ之。不レ笑不レ足二以爲一レ道。故、建言有レ之。明道若レ昧、進道若レ退、夷道若レ纇、上德若レ谷、太白若レ辱、廣德若レ不レ足、建德若レ偷、質直若レ渝、大方無レ隅、大器晚成、大音希聲、大象無形。道隱無レ名。夫唯道善貸且成。

〈上士は道を聞けば、勤めてこれを行ふ。中士は道を聞けば、存るが若く亡ずるが若し。下士は道を聞けば、大いにこれを笑ふ。笑はざれば以て道となすにたらず。故に、建言者にこれあり。明道は昧きが若く、進道は退くが若く、夷道は纇のが若く、上德は谷の若く、太白は辱の若く、廣德は足らざるが若く、建德は偸れるが若く、質直は渝るが若く、大方は隅なく、大器は晚成し、大音は希聲にして、大象は無形なりと。道は隱れて名なし。それ唯道は善く貸して且く成すなり。〉

四十二章

道生レ一、一生レ二、二生レ三、三生二萬物一。萬物負レ陰而抱レ陽、沖氣以爲レ和。人之所レ惡、唯孤寡不穀。而王公以爲レ稱。故、物或損レ之而益、或益レ之而損。人之所レ教、我亦教レ之。强梁者、不レ得二其死一。吾將三以爲二教父一。

〈道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は萬物を生ず。萬物は陰を負ひて陽を抱く。沖氣以て和することをなす。人の惡む所は、唯孤寡不穀のみ。而して王公は以て稱となす。故に、物或はこれを損して益し、或はこれを益して損するなり。人の教ふる所は、我もまたこれを教ふ。强梁なる者は、その死を得ず。吾れ以て教の父となさんとす。〉

四十三章

天下之至柔、馳二騁天下之至堅一、無有入二無間一。吾是以、知二無爲之有一レ益。不言之教、無爲之益、天下希レ及レ之。

〈天下の至柔は、天下の至堅を馳騁し、無有は無間に入る。吾は是を以て無爲の益あることを知るなり。不言の敎と無爲の益とには、天下これに及ぶこと希し。〉

四十四章

名與レ身孰親。身與レ貨孰多。得與レ亡孰病。甚愛必大費、多藏必厚亡。知レ足不レ辱。知レ止不レ殆。可二以長久一。

〈名と身とは孰れか親しきぞ。身と貨とは孰れか多なるぞ。得と亡とは孰れか病なるぞ。甚だ愛すれば必ず大いに費え、多く藏すれば必ず厚く亡ふ。足ることを知れば辱められず。止まることを知れば殆からず。以て長久なるべし。〉

四十五章

大成若レ缺、其用不レ弊。大盈若レ沖、其用不レ窮。大直若レ屈、大巧若レ拙、大辯若レ訥。靜勝レ躁、寒勝レ熱、淸靜爲二天下正一。

〈大成は缺けたるがごときも、その用は弊ならず。大盈は沖しきがごときも、その用は窮まらず。大直は屈せるがごとく、大功は拙なるがごとく、大辯は訥なるがごとし。躁は寒に勝ち、靜は熱に勝つも、淸靜は天下の正たり。〉

四十六章

天下有レ道、却二走馬一以糞、天下無レ道、戎馬生二於郊一。罪莫レ大二於可一レ欲、禍莫レ大二於不一レ知レ足、咎莫レ大二於欲一レ得。故知レ足之足、常足。

〈天下に道あれば、走馬を却けて以て糞するも、天下に道なければ、戎馬は郊に生ぜん。罪は欲すべきよりも大なるはなく、禍は足ることを知らざるよりも大なるはなく、咎は得んと欲するより大なるはなし。故に、足ることを知るの足るは、常に足るなり。〉

四十七章

不レ出レ戶知二天下一、不レ窺レ牖見二天道一。其出彌遠、其知彌少。是以、聖人不レ行而知、不レ見而明、不レ爲而成。

〈戶より出でざるも天下を知り、牖より窺はずして天道を見る。その出づること彌遠ければ、その知ること彌少し。是を以て聖人は行かずして知り、見ずして名に、爲さずして成すなり。〉

四十八章

爲レ學日益、爲レ道日損。損レ之又損、以至於無レ爲。無レ爲而無レ不レ爲。故、取二天下一、常以レ無レ事。及レ有レ事、不レ足二以取二天下一。

〈學を爲むれば日に益し、道を爲むれば日々に損す。これを損してまた損し、以て爲すなきに至る。爲すなくして而も爲さざることなきなり。故に、天下を取るには、常に事なきを以てす。事あるに及べば、以て天下を取るに足らざるなり。〉

四十九章

聖人無二常心一、以二百姓心一爲レ心。善者吾善レ之、不善者吾亦善レ之。德善矣。信者吾信レ之、不信者吾亦信レ之。德信矣。聖人之在二天下一、㸃㸃爲二天下一、渾二其心一。百姓皆注二其耳目一、聖人皆孩レ之。

〈聖人には常の心なく、百姓の心を以て心となす。善なる者は吾これを善とし、不善なる者も吾またこれを善とす。德善なればなり。信なる者は吾これを信とし、不信なる者も吾またこれを信とす。德信なればなり。聖人の天下にあるや、㸃㸃として天下のために、その心を渾にす。百姓は皆その耳目を注ぐ。聖人は皆これを孩にす。〉

五十章

出レ生入レ死。生之徒、十有レ三。死之徒、十有レ三。民之生、動之二於死地一、亦十有レ三。夫何故。以二其生レ之厚一。蓋聞、善攝レ生者、陸行、不レ遇二兕虎一。入レ軍、不レ避二甲兵一。兕無レ所レ投二其角一、虎無レ所レ措二其爪一、兵無レ所レ容二其刃一。夫何故。以三其無二死地一焉。

〈生に出れば（これ）死に入るなり。生の徒は、十に三あり。死の徒は、十に三あり。民の生んとして、動もすれば死地に之く（もの）、また十に三あり。それ何の故ぞ。その生を生とすることの厚きを以てなり。蓋し聞く、善く生を攝する者は、陸行するも、兕虎に遇はず。軍に入るも、甲兵を避けずと。兕はその角を投ずるところなく、虎はその爪を措くところなく、兵もその刃を容るるところなき（がため）なり。それ何の故ぞ。その死地なきを以てなり。〉

五十一章

道生レ之、德畜レ之、物形レ之、勢成レ之。是以、萬物無レ不二尊レ道、而貴一レ德。道之尊、德之貴、夫莫二之爵一、而常自然。故、道生レ之、德畜レ之、長レ之、育レ之、成レ之熟レ之、養レ之、覆レ之。生而不レ有、爲而不レ恃、長而不レ宰　是謂二玄德一。

〈道はこれを生じ、德はこれを畜ひ、物はこれを形し、勢はこれを成すなり。是を以て、萬物は道を尊び、德を貴ばざるはなきなり。道の尊き、德の貴きは、それこれを爵することなくして、而も常に自から然るなり。故に、道はこれを生じ、德はこれを畜ひ、これを長じ、これを育し、これを成し、これを熟し、これを養ひ、これを覆ふなり。生ずるも有せず。為すも恃まず。長ずるも宰せず。これを玄德と謂ふ。〉

五十二章

天下有レ始、以爲二天下母一。既得二其母一、以知二其子一、復守二其母一、沒レ身不レ殆。塞二其兌一、閉二其門一、終レ身不レ勤。開二其兌一、濟二其事一、終レ身不レ救。見レ小曰レ明、守レ柔曰レ强。用二其光一、復二歸其明一、無レ遺二身殃一、是謂二襲常一。

〈天下に始ありて、以て天下の母たり。既にその母を得て、以てその子を知り、復してその母を守らば、身を沒するも殆からざるなり。その兌を塞ぎ、その門を閉づれば、身を終るとも勤れず。その兌を開き、その事を濟さば、身を終るとも救はれざるなり。小を見るを明と曰ひ、柔を守るを强と曰ふ。その光を用ふるも、その明に復歸すれば、身に殃を遺すことなし。これを襲常と謂ふなり。〉

五十三章

使㆓我介然有レ知、行㆓於大道㆒、唯施是畏。大道甚夷、而民好レ徑。朝甚除、田甚蕪、倉甚虛。服㆓文綵㆒、帶㆓利劍㆒、厭㆓飲食㆒、財貨有レ餘。是謂㆓盜竽㆒。非道哉。

〈我をして介然として知どることありて、大道を行はしめんとするも、ただ施なるをこれ畏る。大道は甚だ夷かなるも、而も民は徑を好むなり。朝は甚だ除し、田は甚だ蕪れ、倉は甚だ虛し。文綵を服し、利劍を帶び、飲食に厭き、財貨は余り有り。これを盜竽と謂ふ。非道なるかな。〉

五十四章

善建者不レ拔。善抱者不レ脫。子孫以祭祀不レ輟。修㆓之於身㆒、其德乃眞。修㆓之於家㆒、其德有レ餘。修㆓之於鄉㆒、其德乃長。修㆓之於國㆒、其德乃豐。修㆓之於天下㆒、其德乃普。故、以レ身觀レ身、以レ家觀レ家、以レ鄉觀レ鄉、以レ國觀レ國、以㆓天下㆒觀㆓天下㆒。吾何以知㆓天下然㆒哉。以レ此。

〈善く建つるものは抜けず、善く抱くものは脫せず。子孫は以て祭祀して輟まず。これを身に修むれば、その德は乃ち眞。これを家に修むれば、その德は餘あり。これを鄉に修むれば、その德は乃ち長し。これを國に修むれば、その德は乃ち豐かなり。これを天下に修むれば、その德は乃ち普し。故に、身を以ては身を觀、家を以ては家を觀、鄉を以ては鄉を觀、國を以って國を觀、天下を以ては天下を觀る。吾何を以て天下の然ることを知るや。これを以てなり。〉

五十五章

含德之厚、比㆓於赤子㆒。毒蟲不レ螫。猛獸不レ據。攫鳥不レ搏。骨弱筋柔、而握固。未レ知㆓牝牡之合㆒、而峻作、精之至也。終日號、而嗌不レ嗄、和之至也。知レ和曰レ常、知レ常曰レ明、益レ生曰レ祥、心使レ氣曰レ强。物壯則老。是謂㆓不道㆒。不道早已。

〈含德の厚きは、赤子に比す。毒蟲も螫さず、猛獸も據らず、攫鳥も搏たず。骨は弱く筋は柔らかにして、而も握ることは固し。いまだ牝牡の合ふことを知らざるも、而も峻の作るは、精の至りなり。終日號べども、而も嗌の嗄れざるは、和の至りなり。和を知るを常と曰ひ、常を知るを明と曰ひ、生を益すを祥と曰ひ、心の氣を使ふを强と曰ふ。物は壯なれば則ち老ゆ。これを不道と謂ふ。不道なれば早く已なり。〉

五十六章

知者不レ言、言者不レ知。塞㆓其兌㆒、閉㆓其門㆒、挫㆓其銳㆒、解㆓其紛㆒、和㆓其光㆒、同㆓其塵㆒。是謂㆓玄同㆒。故、不レ可㆓得而親㆒、亦不レ可㆓得而疎㆒。不レ可㆓得而利㆒、亦不レ可㆓得而害㆒。不レ可㆓得而貴㆒、亦不レ可㆓得而賤レ。故、爲㆓天下貴㆒。

〈知る者は言はず、言ふ者は知らざるなり。その兌を塞ぎ、その門を閉ぢ、その鋭を挫き、その紛を解き、その光を和げ、その塵に同じくす。これを玄同と謂ふ。故に、得て親むべからず。また得て疎んずべからず。得て利すべからず。また得て害すべからず。得て貴くすべからず。また得て賤くすべからず。故に、天下の貴となるなり。〉

五十七章

以レ正治レ國、以レ奇用レ兵、以二無事一取二天下一。吾何以知二其然一哉。以レ此。天下多二忌諱一、而民彌貧。民多二利器一、國家滋昏。人多二技巧一、奇物滋起。法令滋彰、盜賊多レ有。故、聖人云、我無爲、而民自化。我好レ靜、而民自正。我無事、而民自富。我無欲、而民自朴。

〈正を以ては國を治め、奇を以ては兵を用ふ。無事を以ては天下を取るなり。吾は何を以てその然るを知るや。これを以てなり。天下に忌諱を多くすれば、而も民はいよいよ貧し。民に利器を多くすれば、國家はますます昏し。人に技巧を多くすれば、奇物はますます起る。法令ますます彰かにならば、盜賊はあること多し。故に、聖人は云ふ、「我は無爲なるも、而も民は自から化す。我は靜を好むも、而も民は自から正しし。我は無事なるも、而も民は自ら富む。我は無欲なるも、而も民自ら朴なり。」と。〉

五十八章

其政悶悶、其民醇醇。其政察察、其民缺缺。禍兮福之所レ倚、福兮禍之所レ伏。孰知二其極一。其無レ止。正復爲レ奇、善復爲レ妖。人之迷、其日固久矣。是以、聖人方而不レ割。廉而不レ劌。直而不レ肆。光而不レ耀。

〈その政悶悶なれば、その民は醇醇たらん。その政察察たれば、その民は缺缺たらん。禍は福の倚る所にして、福は禍いの伏する所なり。孰かその極を知らんや。それ止ることなきなり。正は復すれば奇となり、善は復すれば妖となる。人の迷ふや、その日固に久し。是を以て、聖人は方なれど割かず、廉なれども劌らず、直なれども肆ならず、光あれども耀かざるなり。〉

五十九章

治レ人事レ天、莫レ若レ嗇。夫惟嗇、是謂二早復一。早復謂二之重積德一。重積德、則無レ不レ剋。無レ不レ剋、則莫レ知二其極一。莫レ知二其極一、可二以有一レ國。有レ國之母、可二以長久一。是謂二深根固蔕、長生久視之道一也。

〈人を治め天に事ふるには、嗇にしくはなし。それただ嗇なる、これを早復と謂ふ。早復は、これを重積德と謂ふ。重積德なれば、則ち剋せざることなし。剋せざることなければ、則ちその極を知ることなし。その極を知ることなければ、以て國を有つべし。國を有つの母は、以て長久なるべし。これを深根固蔕、長生久視之道と謂ふなり。〉

六十章

治二大國一、若レ烹二小鮮一。以レ道莅二天下一、其鬼不レ神。非二其鬼不一レ神、其神不レ傷レ人。非二其神不一レ傷レ人、聖人亦不レ傷レ人。夫兩不二相傷一。故、德交歸焉。

〈大國を治むるは、小鮮を烹るがごとし。道を以て天下に莅めば、その鬼も神ならず。その鬼の神ならざるのみにはあらず、その神も人を傷らず。その神も人を傷らざるのみにはあらず、聖人もまた人を傷らざるなり。それ兩ながら相傷らず。故に德は交歸するなり。〉

六十一章

大國者下流、天下之交。天下之牝。牝常以レ靜勝レ牡。以レ靜爲レ下。故、大國以下二小國一、則取二小國一、小國以下二大國一、則取二大國一。故、或下以取、或下而取。大國不レ過レ欲レ兼二畜人一、小國不レ過レ欲二入事一レ人。夫兩者、各得二其所一レ欲。故、大者宜レ爲レ下。

〈大國は下流にして、天下の交なり。天下の牝なり。牝は常に靜を以て牡に勝つ。靜を以て下ることをなすなり。故に、大國以て小國に下れば、則ち小國を取り、小國は以て大國に下れば、則ち大國を取らる。故に、或は下りて以て取り、或は下りて而も取らる。大國は人を兼ね畜はんと欲するに過ぎず。小國は入りて人に事へんと欲するに過ぎず。それ兩者は、おのおのその欲する所を得るなり。故に、大なるものは宜しく下ることをなすべし。〉

六十二章

道者萬物之奥、善人之寶、不善人之所レ保。美言可二以市一、尊行可二以加一レ人。人之不善、何棄之有。故立二天子一、置二三公一、雖レ有三拱璧以先二駟馬一、不レ如三坐進二此道一。古之所三以貴二此道一者何也。不レ曰二求以得、有レ罪以免一耶。故、爲二天下貴一。

〈道は萬物の奥、善人の寶、不善人の保つ所なり。美言は以て市るべく、尊行は以て人に加ふべし。人の不善なる、何の棄つることかこれあらん。故に、天子を立て、三公を置くなり。拱璧の以て駟馬に先だつことありと雖も、坐がらにしてこの道を進むには如かず。古のこの道を貴ぶ所以のものは何ぞや。求むれば以て得、罪あるも以て免ると曰はずや。故に、天下の貴となるなり。〉

六十三章

爲二無爲一、事二無事一、味二無味一、大レ小、多レ少、報レ怨以レ德。圖二難於其易一、爲二大於其細一。天下難事、必作二於易一、天下大事、必作二於細一。是以聖人終不レ爲レ大。故、能成二其大一。夫輕諾必寡信、多易必多難。是以、聖人猶難レ之。故、終無難。

〈無爲を爲し、無事を事とし、無味を味ひ、小を大とし、少を多とし、怨に報ゆるに德を以てす。難をその易に圖り、大をその細になす。天下の難事は必ず易より作り、天下の大事は、必ず細より作る。是を以て、聖人は終に大をなさず。故に、能くその大をなすなり。それ輕諾は必ず寡信にして、多易は必ず多難なり。是を以て、聖人すら猶ほこれを難しとす。故に、終に難きことなきなり。〉

六十四章

其安易レ持、其未レ兆易レ謀、其脆易レ破、其微易レ散。爲二之於未一レ有、治二之於未一レ亂。合抱之木、生二於毫末一、九層之臺、起二於累土一、千里之行、始二於足下一。爲者敗レ之、執者失レ之。聖人無レ爲。故無レ敗。無レ執。故無レ失。民之從レ事、常於二幾成一、而敗レ之。愼レ終如レ始、則無二

敗事一。是以、聖人欲レ不レ欲、不レ貴二難レ得之貨一。學レ不レ學、復二衆人之所一レ過。以輔二萬物之自然一、而不二敢爲一。

〈その安きは持し易く、その未だ兆さざるは謀り易く、その脆きは破り易く、その微なるは散じ易し。これを未だ有らざるになし、これを未だ亂れざるに治む。合抱の木も、毫末より生じ、九層の臺も、累土より起り、千里の行も、足下より始まるなり。爲す者はこれを敗り、執る者はこれを失ふ。聖人は爲すことなし。故に敗るることなし。執ることなし。故に、失ふこと無し。民の事に從ふや、常にほとんど成らんとするに於て、これを敗る。終を愼しむこと始の如くなれば、則ち敗るることなきなり。是を以て、聖人は欲せざるを欲して、得難きの貨を貴ばず。學ばざるを學びて、衆人の過ぐる所に復にし、以て萬物の自然を輔けて、敢て爲さざるなり。〉

六十五章

古之善爲レ道者、非二以明一レ民。將二以愚一レ之。民之難レ治、以二其智多一。以レ智治レ國、國之賊。不二以レ智治一レ國、國之福。知二此兩者一、亦楷式。常知二楷式一、是謂二玄德一。玄德深矣遠矣。與レ物反矣。乃至二於大順一。

〈古の善く道を爲むる者は、以て民を明かにするにはあらず。將に以てこれを愚にせんとするなり。民の治め難きは、その智の多きを以てなり。智を以て國を治むるは、國の賊なり。智を以て國を治めざるは、國の福なり。この兩者を知るは、また楷式なり。常に楷式を知るは、これを玄德と謂ふ。玄德は深し遠し。物とは反せり。乃ち大順に至るなり。〉

六十六章

江海所三以能爲二百谷王一者、以二其善下一レ之。故、能爲二百谷王一。是以、聖人欲レ上レ民、必以レ言下レ之、欲レ先レ民、必以レ身後レ之。是以、聖人處レ上、而民不レ重、處レ前、而民不レ害。是以、天下樂レ推、而不レ厭。以二其不一レ爭故、天下莫二能與レ之爭一。

〈江海のよく百谷の王たる所以のものは、そのよくこれに下るを以てなり。故に、よく百谷の王となるなり。是を以て、聖人は民に上たらんと欲せば、必ず言を以てこれに下り、民に先だたんと欲せば、必ず身を以てこれに後るるなり。是を以て聖人は、聖人は上に處るも、而も民は重しとせず、前に處るも、而も民は害とせざるなり。是を以て、天下は推すことを樂しみて、而も厭はず。その爭はざるを以ての故に、天下はよくこれと爭うことなきなり。〉

六十七章

天下皆謂三我大似二不肖一、夫唯大故、似二不肖一。若肖、久矣其細。我有二三寶一。寶而持レ之。一曰、慈。二曰、儉。三曰、不三敢爲二天下先一。慈故、能勇。儉故、能廣。不三敢爲二天下先一故、能成器長。今捨レ慈且レ勇、捨レ儉且レ廣、捨レ後且レ先。死矣。夫慈以戰則勝、以守則固。天將二救レ之、以レ慈衞レ之。

〈天下はみな我を大なれども不肖に似たりと謂ふも、それただ大なるが故に、不肖に似たるなり。もし肖ならば、久しきかなその細なること。我に三寶あり。寶としてこれを持す。一に曰く〔ママ〕慈。二に曰く、儉。三に曰く、敢て天下の先とならざること。慈なるが故に、よく勇なり。儉なるが故に、よく廣し。敢て天下の先とならざるが故に、よく成器の長たり。今は慈を捨

ててまさに勇ならんとし、儉を捨ててまさに廣からんとし、後たることを捨ててまさに先たらんとす。死なるかな。それ慈は以て戰へば則ち勝ち、以て守れば則ち固し。天はまさにこれを救ひ、慈を以てこれを衞らんとす。〉

六十八章

善爲レ士者、不レ武。善戰者、不レ怒。善勝レ敵者、不レ爭。善用レ人者、爲レ下。是謂二不レ爭之德一。是謂二用レ人之力一。是謂レ配レ天。古之極。

〈善く士たる者は、武からず。善く戰ふ者は、怒らず。善く敵に勝つ者は、爭はず。善く人を用ふる者は、下となる。是を爭はざるの德と謂ふ、是を人を用ふるの力と謂ふ、是を天に配すと謂ふ。古の極なり。〉

六十九章

用レ兵有レ言。吾不二敢爲一レ主、而爲レ客、不二敢進一レ寸、而退レ尺。是謂二行無レ行、攘無レ臂、扔無レ敵、執無一レ兵。禍莫レ大二於輕一レ敵。輕レ敵、幾レ喪二吾寶一。故、抗レ兵相加、哀者勝矣。

〈兵を用ふるに言へることあり。吾は敢て主とならずして、而も客となり、敢て寸を進めずして、而も尺を退くと。是を行くに行なく、攘ぐるに臂なく、扔くに敵なく、執るに兵なしと謂ふ。禍は敵を輕んずるより大なるはなし。敵を輕んずるは、吾が寶を喪ふに幾し。故に、兵を抗げて相加ふるに、哀む者は勝つなり。〉

七十章

吾言、甚易レ知、甚易レ行、天下莫二能知一、莫一能行一。言有レ宗、事有レ君。夫唯無知。是以、不二我知二。知レ我者希、則我貴矣。是以、聖人被レ褐懷レ玉。

〈吾が言ふことは、甚だ知りやすく、甚だ行ひやすきに、天下よく知ることなく、よく行ふことなし。言には宗あり。事には君あり。それただ無知なり。是を以て、我を知らざるなり。我を知るもの希なれば、則ち我は貴し。是を以て、聖人は褐を被るも玉を懷くなり。〉

七十一章

知不レ知上、不レ知知病。夫惟病レ病、是以、不レ病。聖人不レ病、以二其病病一。是以、不レ病。

〈知りて知らずとするは上にして、知らずして知るとするは病なり。それただ病を病とす。是を以て、病ならず。聖人の病ならざるは、その病を病とするを以てなり。是を以て、病ならず。〉

七十二章

民不レ畏レ威、大威至矣。無レ狹二其所一レ居。無レ厭二其所一レ生。夫惟不レ厭。是以、不レ厭。是以、聖人自知、不二自見一。自愛、不二自貴一。故、去レ彼取レ此。

〈民威を畏れざれば、大威は至らん。その居るところを狹しとすることなかれ。その生とするところを厭ふことなかれ。それただ厭はず。是を以て、厭はざるなり。是を以て、聖人は自から知れるも、自からを見はさず。自から愛するも、自からを貴しとせざるなり。故に、彼を去りて此を取る。〉

七十三章

勇二於敢一則殺、勇二於不敢一則活。此兩者、或利、或害。天之所レ惡、孰知二其故一。是以、聖人猶レ難レ之。天之道、不レ爭、而善勝、不レ言、而善應、不レ召、而自來、繟然、而善謀。天網恢恢、疎而不レ失。

〈敢に勇なれば則ち殺。不敢に勇なれば則ち活。この兩者は、或は利にして、或は害なり。天の惡む所、孰かその故を知らんや。是を以て、聖人も猶ほこれを難しとするがごとし。天の道は、爭はずざるも、而も善く勝ち、言はざるも、而も善く應じ、召かざるも、而も自ら來り、繟然たるも、而も善く謀るなり。天網は恢恢なれば、疎なるも而も失はざるなり。〉

七十四章

民不レ畏レ死、奈何、以レ死懼レ之。若使二民常畏一レ死、而爲レ奇者、吾得二執〔ママ〕而殺一レ之、孰敢。常有二司レ殺者一殺。夫代二司レ殺者一殺、是謂下代二大匠一斲上。夫代二大匠一斲者、希レ有レ不レ傷レ手矣。

〈民死を畏れざれば、奈何してか、死を以てこれを懼さんや。若し民をして常に死を畏れしめ、而して奇をなす者を、吾執つて殺すことを得ば、孰か敢てせんや。常に殺を司るものありて殺す。それ殺を司どるものに代つて殺すことを、これを大匠に代つて斲ると謂ふなり。それ大匠に代つて斲るものは、手を傷らざることあること希し。〉

七十五章

民之饑、以二其上食レ稅之多一、是以饑。民之難レ治、以二其上之有一レ爲、是以難レ治。民之輕レ死、以二其求レ生之厚一、是以輕レ死。夫惟無二以レ生爲一者、是賢二於貴一レ生。

〈民の饑ゆるは、その上の稅を食むことの多きを以て、是を以て饑ゆるなり。民の治め難きは、その上の爲すことあるを以て、是を以て治め難きなり。民の死を輕んずるは、その生を求むることの厚きを以て、是を以て死を輕んずなり。それ惟生を以て爲すこと無きものは、これ生を貴ぶより賢れり。〉

七十六章

人之生也柔弱、其死也堅强。萬物草木之生也柔脆、其死也枯槁。故、堅强者、死之徒、柔弱者、生之徒。是以、兵强則レ不勝、木强則共。强大處レ下、柔弱處レ上。

〈人の生まるるや柔弱にして、その死するや堅强なり。萬物草木の生ずるや柔脆にして、その死するや枯槁す。故に、堅强なるものは、死の徒にして、柔弱なるものは、生の徒なり。是を以て、兵强ければ則ち勝たず。木强ければ則ち共せらる。强大は下に處り、柔弱は上に處るなり。〉

七十七章

天之道、其猶レ張レ弓乎。高者抑レ之、下者擧レ之、有レ餘者損レ之、不レ足者補レ之。天之道、損レ有レ餘、而補レ不レ足、人之道、則不レ然。損レ不レ足、以奉レ有レ餘。孰能有レ餘、以奉二天下一。惟有道者。是以、聖人爲而不レ恃、功成而不レ處。其不レ欲レ見レ賢耶。

〈天の道は、それ猶ほ弓を張るが如きか。高きものはこれを抑へ、下きものはこれを擧げて、餘りあるものはこれを損じ、足らざるものはこれを補ふなり。天の道は、餘りあるを損じて、而も足ざるを補ふも、人の道は、則ち然らず。足らざるを損じて、以て餘りあるに奉ずるなり。孰か能く餘りありて、以て天下に奉ぜんや。ただ有道者なり。是を以て、聖人は爲すも恃まず。功成るも處らず。そは賢を見すこと欲せざるなり。〉

七十八章

天下柔弱、莫レ過二於水一。而攻二堅强一者、莫二之能勝一、以三其無二以易一レ之也。弱之勝レ强、柔之勝レ剛、天下莫レ不レ知、莫二能行一。故、聖人云、受二國之垢一、是謂二社稷主一、受二國之不祥一、是謂二天下王一。正言若レ反。

〈天下の柔弱は、水に過ぐるはなし。而して堅强を攻むるものにして、これに能く勝ることなきは、その以てこれに易ふることなきを以てなり。弱の强に勝ち、柔の剛に勝つことは、天下に知らざる（もの）なきも、能く行ふ（もの）なし。故に、聖人は云へり、國の垢を受くる、これを社稷の主と謂ひ、國の不祥を受くる、これを天下の王と謂ふと。正言は反するがごとし。〉

七十九章

和二大怨一、必有二餘怨一。安可二以爲レ善。是以、聖人執二左契一、而不レ責二於人一。有德司レ契、無德司レ徹。天道無レ親。常與二善人一。

〈大怨を和するも、必ず餘怨あり。安んぞ以て善となすべけんや。是を以て、聖人は左契を執つて、而も人を責めず。有德は契を司どり、〔ママ〕無德は徹を司どる。天道には親なし。常に善人に與す。〉

八十章

小國寡民。使下有二什伯之器一、而不上レ用、使下民重レ死、而不二遠徙一、雖レ有二舟轝一、無レ所レ乘レ之、雖レ有二甲兵一、無上レ所レ陳レ之、使下民復結レ繩、而用レ之、甘二其食一、美二其服一、安二其居一、樂二其俗一、鄰國相望、雞狗之聲相聞、民至二老死一、不中相往來上。

〈小國にして寡民。什伯の器あるも、而も用ひざらしめ、民をして死を重んじて、而も遠く徙らず、舟轝有りと雖も、これに乘る所なく、甲兵ありと雖も、これを陳する所なからしめ、民をして復繩を結びて、これを用ひ、その食を甘しとし、その服を美なりとし、その居に安しとし、その俗を樂しみとし、鄰國相望み、雞狗の聲相聞こゆるも、民は老死に至るまで相往來せざらしめん。〉

八十一章

信言不レ美。美言不レ信。善者不レ辯。辯者不レ善。知者不レ博。博者不レ知。聖人不レ積。既以爲レ人、己愈有。既以與レ人、己愈多。天之道、利而不レ害。聖人之道、爲而不レ爭。

〈信言は美ならず。美言は信ならず。善者は辯ならず。辯者は善ならず。知者は博からず。博き者は知らず。聖人は積まず。既く以て人のためにして、己はいよいよ有す。既く以て人に與へて、己はいよいよ多し。天の道は、利して害せず。聖人の道は、爲して爭はざるなり。〉

この文書は翻訳文であり、原文から独立した著作物としての地位を有します。翻訳文のためのライセンスは、この版のみに適用されます。

原文: この作品は1931年1月1日より前に発行され、かつ著作者の没後（団体著作物にあっては公表後又は創作後）100年以上経過しているため、全ての国や地域でパブリックドメインの状態にあります。

翻訳文: この著作物は、1945年に著作者が亡くなって（団体著作物にあっては公表又は創作されて）いるため、ウルグアイ・ラウンド協定法の期日（回復期日を参照）の時点で著作権の保護期間が著作者（共同著作物にあっては、最終に死亡した著作者）の没後（団体著作物にあっては公表後又は創作後）50年以下である国や地域でパブリックドメインの状態にあります。

この著作物は、アメリカ合衆国外で最初に発行され（かつ、その後30日以内にアメリカ合衆国で*発行されておらず*）、**かつ**、1978年より前にアメリカ合衆国の著作権の方式に従わずに発行されたか1978年より後に著作権表示なしに発行され、**かつ**、ウルグアイ・ラウンド協定法の期日（日本国を含むほとんどの国では1996年1月1日）に本国でパブリックドメインになっていたため、アメリカ合衆国においてパブリックドメインの状態にあります。

「https://ja.wikisource.org/w/index.php?title=老子道徳経&oldid=215391」から取得